

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版



レオタード風紀委員長
御神楽月見

小説 岡下 誠

挿絵 高浜太郎

第一章	二人の風紀委員
第二章	甘い戯れと苦い失態
第三章	昼休みの狂宴
第四章	音楽教室に響く嬌声
第五章	二人だけの風紀委員会

登場人物紹介

Characters



みかくら つきみ 御神楽 月見

財閥の令嬢にして、華聖学園の二代目風紀委員長。一向によくならない風紀を憂い、レオタード姿の「風紀委員会特務執行係」に変装して、実力行使にでる。地の髪色は栗色だが、普段は黒に染めている。二年三組。

たかやま さき 高山 咲

風紀委員会に所属する一年生。ブルマー、バイザー姿になり、月見とともに特務執行係として学園の風紀を取り締まる。童顔、子供のような体型。蝶の触覚のようなツインテールによっていっそう幼く見える。

いじゅういん なつき 伊集院 夏樹

御神楽財閥とは犬猿の仲である伊集院財閥の娘。校則違反の茶髪、イヤリング、ルーズソックスという格好をしている。細面でスレンダーな不良少女。月見と同じ二年三組。

かわなか しま 川中 志麻

夏樹の取り巻きで、伊集院財閥のグループ企業社長の娘。肉感的で、金髪のボブカットが目立つ不良少女。二年五組。

ふじむら さおり 藤村 佐緒里

華聖学園の音楽教諭。月見とは公私で折り合いが悪い。

ここで夏樹たちの悪事を告発することは簡単だ。自分は後輩を助けようとしただけで、無理矢理に猥褻行為をされたのだ、と。

しかし、咲の身はどうなるだろう。淫らで恥ずかしい写真を学園中にばらまかれ、被害者であるにもかかわらず退学を余儀なくされてしまうに違いない。そればかりでなく、身体的な虐待を加えられる危険もある。少女の純潔には手を出さないと夏樹は約束したが、もしここで下手なことをしたら、それこそ咲は、心と身体の双方に消えない傷を受けてしまうのだ。半ば裏切るような形で志麻と姉妹の契りを結んだ後輩を、いまだに月見は深く案じていた。

「わかり……ました……」

うつむきながらぼつりとつぶやく。打開策が見つかるまでは、大人しく夏樹の要求を受け入れ続けるしかなかった。これから身に降りかかるであろうことを考えると、被虐の快感に冒されて身体も脳内も熱く煮えたぎってしまう。

「着替えてきます……」

さらなる恥辱の試練を受ける決意をした月見だったが、尿と精液にまみれた下半身のことがあるので、せめてどこか他のところで変身したかった。辱められて感じてしまうという淫らな身体の持ち主ではあっても、心は淑やかなお嬢様である。教室移動用のカバンを手にして、美貌を上気させたまま、ふらふらと出口へ行きかけた。

が、その前に女教師が立ちふさがる。

「いけません。この場で着替えなさい。それも罰の内よ」

「ど、どうしてですか……クラスには男子生徒もいます。殿方のいる前では、いくらなんでも着替えることはできません」

教室の後ろのほうの席でひとかたまりになっている不良男子ども三人は、風紀委員長の脱衣シーンに期待しているためか、揃って食い入るようにこちらを見ていた。

「いいですか、御神楽さん。華聖学園は圧倒的に女生徒のほうが多いとはいえ、歴とした共学校です。それなのにあのようなレオタード姿で校内をうろつき回るなど、乙女としての羞恥心が少々足りません。男性に見られて恥ずかしいという気持ちを学んでもらうためにも、ここで制服を脱いでもらいます」

レオタード姿の上半身をあらわにしている月見は、すでに見られることの心地よさに酔い始めて、正常な判断もままならなくなっている。佐緒里の駆使する強引なレトリックをおかしいとも思わず、教師の指示は素直に聞くものであるという風紀委員の本能に従って、のろのろと令嬢は席に戻った。

ためらいがちにプリーツスカートへ手をかけたが、そこから先の動作をすることができない。もしそれを下ろしてしまえば、ドロドロになっているクロッチがあらわになってしまふのだ。しかし、佐緒里の鋭い視線と夏樹の悪意に満ちた笑みが、早くするようにと促

している。震える指先でホックを外し、サイドにあるファスナーを下ろした。ゆっくりと身を屈めながら脱いでゆき、膝まで下ろしたところで脚から抜く。

良家の息女の下腹部が、クラスメイトたちの前に公開される。そこに密着しているレオタードの色は一見するとピンクだが、よくよく見るとそう単純に言いきることはできなかつた。尻の割れ目から股間にかけて、白いものがべったりとついてまだらになっている。それに加えてクロッチの部分は、おもらしをしてしまったかのような濡れ染みができていた。白い模様はレオタードの中で射精された痕跡で、股の濡れているのは着用者がとめどなく淫液を吐き出し続けた結果である。

そして、スカートを脱ぐことよって、今までかろうじて封印されてきた臭気が周囲に拡散し、クラスメイトたちの鼻にまで届くこととなった。

精液と愛液の匂い。尻の合わせ目にぶちまけられた牡の白濁汁は、体温に温められて濃い臭気をぶんぶんと放っており、肌に染み込んだ匂いが永遠に落ちないのではないかと危惧するほどである。また、これまで絶え間なく被虐の快感を味わってきた秘唇は蜜を垂れ流しっぱなしで、濡れたナイロン地は乾く暇も与えられない。失禁と見まごうくらいにクロッチはびしょびしょに濡れており、ピンクの化繊から今にも蜜が染み出てきそうである。男と女の最もセクシャルな香りがレオタードの内側で融合し、濃縮された香りとなって漂っていた。

しかもそこにおしつこの匂いが混じる。今朝早くに粗相してしまったあと、レオタードを着替えることもままならず、股間を綺麗に洗うこともできなかったのだ。吸湿性の悪いナイロンとはいえ、着衣のまま失禁すれば否が応でも尿をたっぷりと吸ってしまう。時間が経つにつれてアンモニア臭の不快さは増し、目眩のするような恥ずかしさとともに自分の演じた失態を繰り返し思い出すことを強要された。

令嬢の下腹部から立ち上る三つの恥香は分かちがたく混じり合い、音楽教室を淫らに染め上げている。ムツとするような生臭さでありながらも、どこか劣情を煽り、男女の奥底に潜む淫らを突き動かす媚香。それを吸い込んだ女生徒たちは様々な反応を示した。ある者は顔をしかめ、またある者は頬を赤らめる。中には、瞳を潤ませて密かに脚をこすり合わせている者もいた。

レオタードの下にはインナーショーツを穿いていないので、股間の底部がゆるやかに盛り上がりつつある様子があからさまになっている。極薄ナイロン地は肉の割れ目にぎゅちりと食い込んで、内部に息づく陰部の形を正確にかたどっていた。太腿の付け根の中心部は、船底のような楕円形にふくらんでいて、そこに一本の割れ筋が縦に通っている。

濡れまみれ、秘唇の割れ目すら浮き出ているレオタード。それを級友たちに見られながらも、月見は変身を続けなければならない。薄いレンズの眼鏡を外し、ケースの中にしたまった。いつも持ち歩いているバッグの中から絹の手袋とピンクのブーツを取り出して、ク

ラスメイトが見守る中で身につけた。くびれた腰にピンクのスカーフを巻きつけ、きゅつと結んでから脇に垂らす。

化粧ボーチからリップとアイシャドウを出して、震える手でメイクをしてゆく。良家に育った娘にとつて人前で化粧をするのは恥ずかしいことであり、級友のほとんどが女子だとしても、みんなに見つめられながらそれをするのは屈辱でさえあった。普段は身だしなみ程度にしかメイクをしない月見は、眼鏡のせいもあって真面目で知的とのイメージが先行しがちだが、リップをぬり、アイシャドウを刷くにつれて、財閥のお嬢様らしい華やかで気品ある美貌が引き立ってゆく。

最後にブルーのコンタクトレンズを入れれば変身完了だ。

「き……着替え終わりましたわ……」

左手で豊満な胸をかき抱いて、はちきれそうな肉山の先端に浮き出ている二つの尖りを隠した。右手はぐしょ濡れになった股間にあてがい、密着したクロッチが形づくる肉の割れ目を級友たちの視線から遮る。むっちりとした太腿をぎゅつと閉じ合わせ、恥じらうように腰を引き気味にして、乙女として人目にさらしてはならない箇所を少しでも守ろうとしていた。その恥じらいの仕草によって、ある種の被虐美が漂っていることも知らずに。

クラスメイトたちは、特務執行係の姿になった月見を見て密かに溜息をついた。清楚で知的な少女が、肉感的で色香に溢れた女に転生したのだ。その落差は非常に激しく、とも

すれば月見と特務執行係が同一人物であることを忘れてしまいそうになる。

「髪の色が違うじゃん」

横柄な態度で椅子にかけている夏樹がぶっきらぼうに言った。流れ落ちる滝のように令嬢の背中に垂れている髪は、単なる黒色だ。

「じ、実は……地毛は栗色なのですけれど、風紀委員長がそれでは示しがつきませんので、黒に染めておりましたの……」

「なんだ。髪染めてんなら、私たちと同じじゃない。それで、よく他人のことを注意できたもんね」

「そ、それは……そうですけれど……」

長い髪をしたレオタード娘は、伏し目がちの表情で言いよどむ。茶髪の女生徒は不意に意地悪そうな笑みを浮かべて、猫撫で声といった感じの声音で言った。

「いい方法があるよ。あんたは私の髪を黒く染めようとしてくれたけれど、そのお礼に教えてあげる。とっておきの染め落としの方法を」

「え……」

月見は嫌な予感におののく。先週、夏樹の頭に墨汁をかけたことへの意趣返しをするつもりだろう。しかし具体的になにを言われるかは想像もつかない。

「精液かけると、髪を痛めずによく落ちるんだって。このクラスにもちようど男子が三人

いるからさ、出してもらいなよ」

二年三組の男子生徒三名が席から立ち上がり、女肉に飢えた獣のような目でこちらを見ていた。灰色をしたスラックスの股間の部分は、それとわかるくらいにふくらんでいる。昼休みに男根を女肉にこすりつけ、思いつきり精液を放ったにもかかわらず、旺盛な性欲はもう回復しているようだ。ギラギラとした目で今にも襲いかかってきそうである。

「そつ、そんなことできるわけありません……わ……わ……」

生理的嫌悪感から月見は思わず叫んだ。語尾が途切れたのは夏樹のニヤけた顔を見たからで、咲のことを思い出させられた令嬢は、気品ある美貌を真紅に色づかせて沈黙した。胸と股間を守るようにしてぎゅっと手を押し当てながら、辱めを受けるしか道がない己の運命を呪う。

「そうね。では、御神楽さんたちには、教室の前に出てやってもらおうかしら」

佐緒里の冷徹な口調と言葉の内容に、音楽室の中に細波のようなざわめきが広まる。女生徒たちは再び顔を見合わせ、ヒソヒソとささやきを交わした。息を潜めて事の成り行きを見守っていた彼女らは、まさか女教師がそんなことを後押しするとは思ってもみなかったのだ。一人の女生徒を公然と陵辱するにも等しい行為を。

少女たちの疑問に答えるように、美人教師は平静かつ冷たい調子で続ける。

「学園中を騙していただけでなく、髪を染めていたり、昼休みに男性とかがわしいこと

をしていたのですから、少しばかり厳しい罰は当然です。みんなに謝罪する意味もあるのだから、御神楽さんは教壇の上で染料を落としてもらいなさい」

強引な理由を付して佐緒里は姦淫刑の判決文を読み上げる。

女生徒たちは、月見を辱めようとする音楽教諭の底意に薄々気づき、もはや誰も異議を差し挟もうとはしなくなった。

生真面目でとっつきにくいという目で見られてきた月見だったが、お嬢様ぶったりすることもなく、優しい心根の持ち主でもあるので、大多数のクラスメイトは彼女のことを嫌っているわけではない。むしろ好意的に見ていた。が、清楚でお淑やかな月見が、昼休みに精液を浴びるような行為をしていると知って、ショックを受けた女子は少なくない。また、特務執行係として高圧的な感じで風紀を取り締まっていた彼女が、為す術なく辱められている様を見てみたいと思っている者もいた。そして誰もが思っていたのは『自分が言い出しっぺになるのは嫌だ』ということだ。この淫靡な雰囲気の中で、真っ先に反対を唱えようものなら、今度は自分が夏樹の標的にされかねない。伊集院家の娘は大概の女生徒に嫌われていたが、同時に恐れられてもおり、影響力は強大であった。

三人の男子生徒が立ち並び、レオタードを身につけた風紀委員長はその前に跪く。昼休みに執り行われた屈辱の儀式が、大勢の女生徒たちを観衆に加えて再び行われようとしている。男どもが張り裂けんばかりに股間をふくらませているのを目の当たりにして、改め

て嫌悪感と恥ずかしさがこみ上げてきた。

「おい、黙ってるんじゃねえよ。なんか、俺たちに頼むことがあるんだろ。お嬢様のくせに礼儀がなつてねえなあ」

「チ○ポをしごく時の作法なんて、まだ習ってないんじゃねえのか？」

「へへへ……じゃあ、俺たちが教えてやるよ。花嫁修業だっ」

好き勝手な言葉の数々が頭上から降ってくるが月見は表立って逆らえず、男どもを気丈に睨みつける。席を立った夏樹が前に出てきて、跪く令嬢の背後に立った。

「うふふふ……御神楽家って娘の教育が全然だめじゃん。男に奉仕する時の礼儀作法、手取り足取り教え込んでやるよ。チ○ポをしごく場合の挨拶は……」

耳元にささやかれる屈辱の口上に、月見の白い頬がほんのりと赤らむ。

「つ……つたない……手こき……ではございますが、月見の髪の毛に……どうか皆様の……皆様の……ざーめんをください……」

不良男子に性的奉仕を申し出るといふ屈辱に何度も言葉を詰まらせながら、風紀委員長はようやく言い終えることができた。

目の高さにある股間のふくらみに月見は怖ず怖ずと手を伸ばし、震える指先でファスナーを下ろしてゆく。ストラックスの布地は内側から押し上げられており、中で暴れているモノの存在を如実に示していた。女性である自分からそのような行為をするなど、まるで男

の性器を求めているかのようで、恥ずかしさのあまりにレオタードが貼りついた肢体がぼつと熱くなる。しかもその淫らな姿をクラスメイト全員に舐めるように見られているかと思うと、子宮の奥がしくしくとうずくのだ。

絹の手袋をはめた手をファスナーの間に差し込んでトランクスをかき分け、中で張りきっている肉根を掴む。焼けた鉄の棒のようなそれに触れるのは今日二度目であった。肉筒は硬く強ばっており、しかも先端が下着に引っかかっている、なかなか外に出すことができない。きわどいデザインのレオタードを着た少女は、男子生徒の足元にかしずいて、大きな胸をゆさゆさと揺らしながらペニスを掴み出そうとしている。その有様は、男性客に奉仕することを生業としている女そのものだ。

下着の前合わせからブルンツと勢いよく肉棒が飛び出し、月見は「ひいつ」と小さく悲鳴を上げた。しかし懸命に残りの男子たちの股間にも手をやり、膝立ちの姿勢で男根を引っ張り出す。

音楽室にいる他の女生徒たちも息を呑んで男子のそれを見つめていた。眉をひそめたり頬を赤らめたりしながらも、目を逸らしている者は一人もない。

「見てばかりいないで、早く握りな。あんたのためにチ○ポ出してるんだよ」

不良女生徒に命じられるまま、高貴な家柄の令嬢は、男子の下腹部から突き出ている男根を怖々と握る。絹地を通してすら剛魔羅の発する熱を感じられ、男性がその性器に溜め

込んでいる欲望のほどを思うと生理的嫌悪に身震いしてしまう。純白の絹手袋と不気味に黒ずんでいるペニス、清楚で汚れを知らない令嬢と卑劣で獣欲しか頭のない男たちを象徴しているかのようだ。天を衝く男根をゆつくりとしごき上げてゆくと、月見の手の中で太い肉茎はビクビクと脈打った。膨満しきって醜い姿をさらす龟头は、先端の割れ口から先汁を吐き出して肉の歓喜を叫び散らす。

「うひよおお。下手くそだけど、絹の感触がたまんねえー」

下卑た声に嘲られながらも月見は懸命になつて手を動かし、男を満足させようとして奉仕に努めた。少しでも早くこの恥辱の時間を終わらせるために。握りきれないほどの太さを誇る幹を掴み、夏樹の指導に従つて力の入れ具合を加減しながら、初々しい手つきで男を慰める。

「おい、俺のも早くやってくれよ。もう待てねえんだからさ」

「俺のもだ。早くしてくれねえと、髪じゃなくて顔にぶっかけるぞ」

いきり立った二本の男根が目の前に突きつけられた。どのペニスも色や形に多少の差こそあるが、女の肉を喰らいたいとばかりにカチカチに強ばっていることは共通している。

「手は二本あるんでしょ。両方とも使いな」

「よ……よろしくつてよ……」

セミロングの白い手袋をはめた手が三本の太肉を代わる代わるこすり上げてゆく様は、

紋白蝶が赤い花に蜜を求めているかのようだ。見事に傘を張った肉茸は、透明な汁をびゆるびゆると吐き出しながら絹地の肌ざわりを喜んでいる。

最初は嫌々にやっていた手淫奉仕だが、次第に男根の存在感に圧倒され、やがてそうするのが当然のような気分になせられていった。しかし亀頭がはぜる様子はまったくなく、しばらくしごいているうちに、男根から漂う牡臭にあてられて頭がくらくらしてくる。

「あんたさあ、そんなにでかい胸があるんだから、それも使いなよ。私が手伝ってやるからさ」

命じられるままに乳房に両手を添え、すくい上げるように持ち上げると、月見の背中に夏樹が寄り添ってきた。脇腹の横から伸びてきた手が令嬢のそれにかぶさってきて、ぐいっと押し揉まれる。

「んふう……」

たったそれだけで大きな肉塊に心地よいものが満ち、思わず月見は艶めいた声を漏らしてしまふ。

「手の力を抜きな。あたしがパイプリの実技指導をしてやるよ」

おそらく経験豊富であろうあはずれ娘に操られて、肉隆起の間に男根を挟み込んだ。そのまま柔らかな肉で硬いものを包み込み、やわやわと乳房ごと揉みこねる。熱く硬直した肉筒を胸の谷間に感じ、股間に咲く花がじゅくくと潤んだ。レオタードに浮き出た二つの

突起が男の下腹部にこすれ、鮮烈な快楽が弾けた。

「んっ……くふううっ……んくっ……んっ、んううっ……」

はしたない声を出すまいとして風紀委員長は口を喋むが、喉の奥に籠もったような低い嬌声が荒い息づかいとともに漏れ出てしまう。実技指導者の熟練した手は容赦なく未経験者を操り、ナイロンに詰まった肉でもって男根をマッサージしてゆく。

全身を駆け回る喜悦に月見は身悶えし、長く美しい自慢の髪を振り乱した。ナイロン地を突き破りそうな勢いで乳首は尖り、わずかにこすれただけでも甘美な刺激が炸裂する。乳房全体も極めて高感度の快楽受容体と化しており、揉みしだかれるたびに熱いものが煮えこぼれるような感覚に満たされた。奉仕を受けている男よりも、奉仕者である女のほうがよがり狂っている始末で、レオタードのクロッチの下では秘唇が粘液を噴き出している。乳房による愛撫からあぶれた二人の男は、己の男根に令嬢の髪をぐるぐると巻きつけ、髪ごとしごき上げ始めた。

「ぐへへ……お嬢様の髪の毛だつたら、こういうのもいいもんだぜえっ」

髪にくるまれた茎部を右手でしごきながら、左手は別の髪束を掴んだ。それを丸めてまとめ、タワシに見立ててゴシゴシと亀頭をこすった。先汁の滲む割れ口や、のっぺりとした斜面を洗い、恥垢が溜まりやすい傘の裏側には特に念を入れてこすりつける。

「いやあああつ！ お、およしなさい。匂いがついてしましますわっ！ およしなさいと



言うのがわからないのっ！」

あまりにもおぞましい行為に、淑女の体面を繕うことも忘れて取り乱した叫びを上げてしまう。女の命とも言われる髪をオナニーの道具にされ、すえて腐ったような恥垢の匂いでマーキングされ、自分が穢れにまみれてしまったことを思い知らされた。

圧倒的な恥辱に打ちのめされて、それが被虐の愉悦となって跳ね返ってくる。量感ある乳房は歓喜に満ち溢れ、貯蔵しきれなくなった快楽は見えざる液体となって、尖りきった乳首の先からびゅくびゅくと射出された。刺激を与えられぬまま放置されてきた恥唇は、はしたないままで咲きほころんで花びらを広げている。陰核包皮は先程から剥け上がっており、鋭敏な肉豆は愛撫を懇願していた。

「ふふふ……その調子よ。もうすっかりその気になってるじゃん」

ふと気がつくと、いつの間にか夏樹の手がなくなっている。

「え？ あああ？ いや、ああ……手が、手がああ……はひいいい……」

両腕の自由を得た月見だったが、自らの意志で乳房をこね回し続け、いきり立った肉棒を慰めていた。咲の写真をネタに脅されているからではなく、豊麗な胸乳から泉のように溢れ出る快楽に酔って、己の手を止めることができなかつたのだ。掌で覆いきれないほどのサイズを誇る肉塊をすくい上げながら押し揉み、谷間に挟まっている太肉棒にこすりつけてゆく。布地に押し込められた肉が熱い男根を感じ、あるいは生地に浮き出た肉粒が男

の下腹部に触れたりすると、歡喜の津波が胸に押し寄せてくるのだ。

気品ある顔立ちを欲情に上気させ、リップがぬられた唇を半開きにしながら、由緒正しい家柄のお嬢様は胸奉仕という名の自慰を繰り広げる。

茶髪娘の右手はというと、膝立ちになった月見の股間にまで這い下りていた。濡れたクロッチが食い込んでいる肉の割れ目に指をあてがわれ、縦筋に沿って上下になぞられる。

「や……そこは……ん……ひい……」

腰を引いて悪戯な手から逃れようとするが、夏樹の身体に突き当たって行き止まりになっていた。ごく軽く爪の先でナイロン地を引っかかれると、焦れたいようなくすぐったいような感覚に襲われ、中途半端に刺激された秘唇は欲求不満を爆発させる。肉門はヒクヒクと蠢き、処女孔は収縮を繰り返してじゅぷじゅぷと淫汁をおもらしした。

「オマ○コ、こんなに濡れてるじゃん。おまけにすっごい臭い。お嬢様として、っていうか女として恥ずかしくないの？」

音楽室中に聞こえるような大声で言われ、月見はぎゅっと目を瞑る。肉感美に恵まれた肢体はもう昇りつめる寸前にまで追い上げられていながら、その場で足踏みすることを強いられていた。不良女生徒の手は決してとどめを刺してはくれず、羽毛で撫でているかのような刺激で意地悪く焦らし続ける。

女体はどこもかしこも蕩けきり、食べ頃の肉へと仕上げられていた。ただでさえ感じや

すい秘唇を夏樹の巧みな手管によって翻弄されて、その手をはねのけようとするどころか、より強い慰撫を求めるかのように股間を突き出し、あるいは腰をくねり回す。自身の右手を股間に伸ばしてもどかしい快楽にけりをつけたかったが、慎ましやかな令嬢は、もうなぐりかけている理性を総動員してその欲求をこらえている。

と、その時、いきなり肉の盛り上がりに指腹がむにゅつと押し当てられ、円を描くようにして強くこすり回された。

「んはあああア、ひいひい、あ、ああつ、あんうう……」

叫びにも似た大きな嬌声は、音楽室の防音設備によって吸収されて外部には漏れない。背筋が勢いよく反り返り、下半身がビクンッと跳ねる。生殺しにされていた秘唇は、待ちに待った激しい愛撫に随喜の涙を流した。股布に吸収しきれなくなった熱い蜜液がじゅつと滲み出て、陵辱者の指先にまとわりつく。快楽という名の秘槍に女花を刺し貫かれ、えぐられ、荒々しくかき回され、良家の令嬢は恥ずかしげもなく身悶えた。

花園全体をまんべんなく撫でていた指は、その中心部に埋め込まれた小さなしこりを探りあて、そこ一点に狙いを絞り込んでくる。レオタード越しにでも所在が知れてしまうほどに身をふくらませた肉豆が、集中的な責めにさらされた。指先を突き立てられて、小刻みな振動を執拗なまでに送りつけられる。

「あああああつ、だめええ、そこはああああ……あひいいつ、あああああつ！」

女体の中でも最も感じやすい肉粒を狙い撃ちされてかすかな痛みが走るが、それを遙かに上回る純度の高い快感が弾け散った。小さな突起があまりにも膨張しすぎたため、とうとう破裂してしまふ、といったような心象に囚われる。歡喜の渦に巻き込まれて精神は性感に呑まれ、御神樂家の息女は一匹の牝になり果てた。肉感的な肢体を夏樹の腕の中でビクビクと痙攣させながら、昇ろうとして昇りきれなかつた頂上へと飛翔する。

「あああああああああつ、あひいいつ、はああああアアつ」

あたりをはばかり啼き、肉の歡喜にむせび、月見は不良女子の指づかいに屈服した。全身を駆け抜ける快樂の奔流に身を任せ、身体を弓なりにつっぱらせる。その表情には、良家のお嬢様らしい淑やかさも、風紀を取り締まっている時の颯爽とした雰囲気もまったくなく、ただ女としての喜びに我を忘れていたといった様子だ。全身から力が抜けて心地よい浮遊感に包み込まれ、颯られるままに肉人形として跪く。

それを待っていたかのように、男どもの肉砲が熱い白濁弾を一斉射出した。

びゅぶぶぶ、びゅくくびゅつ、ぶびゅびゅびゅびよつ、ぼびゅびゅぶびゅ……。

髪ごとしごいてオナニーをしていた男子は、左手に掴んでいる髪束に思いっきり精を吐き出す。胸奉仕をしていたペニスも噴水のように牡液を噴き出し、大部分は前髪にかかったのだが、一部は令嬢の美貌を汚した。

腰まで届こうかという長く美しい黒髪に白い粘液が浴びせかけられ、べつとりとこびり

つく。むせ返って呼吸が困難になるくらい濃い牡臭に包まれて、自身が男の精にまみれてしまったことを実感させられた。粘つく精液は髪を伝い落ち、前髪にかかったものは顔にまで滴ってくる。レオタードを着た女は尻を床につけて、魂を抜かれたかのように呆然として力なく座り込んでいた。

「ねえ、みんなっ」

音楽室にいる女生徒たちに夏樹は呼びかける。

「髪を染料を落とすの、手伝ってよ。精液を髪にすり込んでやって」

令嬢が辱められているシーンに見入っていた少女たちは、ざわざわとしながらためらいがちに顔を見合わせていた。その中の一人が思いきったように前に出てくる。恐る恐る月見の髪に触れ、リンスをつけるようにして白いゲル状粘液をぬり広げてゆく。さらにもう二、三人が席を立つと、他の女生徒たちも次々とそれに続いた。孤立することをなによりも嫌う女子たちは、淫らな陵辱の雰囲気呑み込まれ、輪辱の標的が自分でないことに安堵しながら令嬢の髪に牡汁をすりつける。最初に前へ進み出た女生徒が事前に夏樹から因果を含められていたことなど、もはやどうでもいいことであつた。

何本もの手によって髪の本根から先までを触られ、撫でられて、若い牡獣の生命力の発露である白濁のリンスをすり込まれる。さながら、クラスの少女全員から女の象徴を陵辱されているかのようだ。頭髮に群がる手群の中には親しい友人たちの手も交じっており、



月見は悲しみと孤立感を味わわれた。

騒然とした室内で、月見はただされるがままになっている。特務執行係であることをあばかれ、下卑た男たちの勃起に奉仕をさせられ、しかもクラスメイトたちにその姿を見物され、今は髪に精液をぬり込められているのだ。一つ一つの辱めですら失神してしまいそうなほどの恥辱であるのに、それらの羞恥刑を続けざまに執行され、令嬢の精神は灼ききれる寸前にまで追いつめられていた。しかし表向きは心理状態とは裏腹に、心の深層では性的興奮を覚えており、知らぬ間に身体がうずきを訴えてしまう。

絶頂の余韻にひたっている今ですら、クラス的女生徒たち全員から辱められて新たな牝汁の湧出を予感していた。目立って大きな胸と、健康的にくびれた腰、肉づきよく張りのある尻、彫刻のように華麗な線をした脚。抜群のプロポーションを誇る肢体は、その中に煮えたぎるような熱いものを飼っており、暴れ回るそれを懸命になって閉じ込めているのだ。その情動はたった一度の絶頂では静めきれないほどに盛んで、級友たちに髪を弄ばれて再び騒ぎ始める。

「あれ、これってあたしのじゃん」

月見のバッグを漁っていた夏樹がなにかを取り出して掲げて見せた。白く細い指が摘んでいるのは、精巧な細工が施された白金のイヤリングだ。先週に不良女生徒から没収したアクセサリーを、なにやかやで返却しそびれていたのである。

「いつも持ち歩いてるってことは、あんたもこれを着けたかったんじゃない？ ならあたしがつけてやるよ」

男子の一人によって特務執行係の腕が後ろ手に押さえつけられた。そうされると胸が突き出され、レオタードの中に詰まっている乳房の量感が強調される。

「や……なにをするの……お放しなさい……」

言葉だけは高飛車だが、高貴な顔立ちの令嬢の唇から漏れる口調は弱々しい。拘束された少女の前に夏樹がしゃがんで、ニヤニヤと淫らがましい笑みを浮かべながらこちらの表情を覗き込んできた。レオタードの左右の肩紐に茶髪娘の手がかかり、勢いよくずるりと剥き下げられる。

「ひあああつ」

豊麗な乳房が重たげにぶるんと飛び出し、ピンクのレオタードの外へとこぼれ出た。ナイロン生地締めつけから解放された脂肪は、嬉しそうにゆさゆさと弾んでいる。掌に収まりきれないほどの大きさにもかかわらず、張りと弾力を保って前方に張り出していた。胸乳の肌はくすみのまったくない純白で、さながら雪に覆われた山肌のような。その頂きにある乳輪は鮮烈な蔷薇色に色づいており、周囲との境目はくつきりとしている。ぷくつとふくらんだ小粒の乳首は、級友たちの視線にさらされていることを恥じるかのように小刻みに震えながらも、しっかりと充血して自己主張をしていた。

臉の奥が熱くなり、垂れがちの目の縁には見る見る涙が溜まっていった。

「そういうわけだったのね……」

「私のせいで……お姉さまがこんな目に……あの時、私さえドジをしなければ……」

大きな乳房の顔を埋めてブルマー娘がしゃくり上げてみると、月見がそつと上体を傾けてくる。上級生は身体を密着させて、咲の耳元に優しくささやきかけた。

「あなたのせいではありませんわ。それよりも、なにか酷いことをされなかった？」

「それは……」

咲が言いよんだ時、ツインテールがいきなり掴まれた。

「痛っ……あああつ、放してくださいっ」

髪束を引っ張り上げられる痛みに負けて風紀委員長の身体から引き離され、立ち上がることを強いられる。後ろを見ると、金髪をボブカットにした上級生が不機嫌そうなふくれっ面をしていた。

「咲。あんたの『お姉さま』はあたしだろ。今度こいつのことを『お姉さま』って呼んだら、膜、引き裂くぞ」

今まで何度となく繰り返されてきた舊し文句。しかし、咲と志麻が銀の指輪を交換して姉妹の契りを結んだのは確かな事実なのだ。

「も、申し訳ありません、『お姉さま』……」

「あんたとあたしが姉妹であることを、みんなに見せてやんな。特に、あそこで胸を丸出しにしている女にね」

おもむろに志麻は、自身のスカートの中に手を入れて、黒のTバックショーツを脱ぎ下ろした。男に見せることを意識した、というよりも男に脱がせてもらうことを目的にした扇情的できわどいデザインの下着で、尻の部分はもとより、クロッチの布地も極端に小さい。金髪の不良女生徒は、つい今し方まで自分の秘唇に食い込んでいた布きれを音楽教室の隅へと放り投げた。そして、それを指で示して命令する。

「ほら、取っておいで」

人間性を踏みにじられるような屈辱的な行為を命じられ、咲は一瞬ためらった。しかし、姉の言葉は絶対という姉妹の掟に従って、後ろ手に拘束されたままおぼつかない足取りで歩き出す。と同時に、股間の割れ目に貼りつけられている異物が身を震わせ始めた。

「ひゃうんっ！」

濃紺のブルマーを穿いた腰が、ふるふるっと痙攣する。女を責めることのみを目的として設計された器具にとつて、性の喜びを知ってから日の浅い少女を快楽に悶えさせることなど造作もないことであった。わずかに産毛が生えているばかりの幼げな女唇は、たちまち高ぶらされて身悶えする。

二年三組全員の目がツインテールの少女に集中したが、当の本人は、何十人の視線より

も、たった一人の女生徒のそれを気にしていた。

（先輩い……見ないでください……お願いですからどうか……）

ブルマー内の淫具がもたらす快感に耐えながら歩く十数歩は、ものすごく遠い道のりに感じられた。Tバックショーツのところまでたどり着いても、手錠に縛められている故に手で持ち上げることはできない。しゃがみ込んで上体を屈め、他人が穿いていた下着を口でくわえる。まだかすかに残っている体温を唇に感じ、三角形をした股布の内側から漂う女陰臭を鼻で嗅いでしまう。

咲は、主人が投げた棒きれを取って戻ってくる犬のように、姉が放り捨てたショーツをくわえて帰った。恥ずかしさと屈辱感で顔面が茹で上がったように赤くなり、意識には霧がかかって目眩がしそうなほどだ。

「よしよし。いい娘だ」

頭を撫でられるが、その様子は姉と妹というよりも、やはり主人と飼犬のようである。ボブカットの金髪娘は丸みのある顔にニタニタと笑みをたたえながら、幼顔の妹に対してさらに淫虐な指令を下した。

「じゃあ、次は、あたしのオマ○コをしゃぶりな」

「そ……そんな……こと……」

なんとなくそのことを予期はしていたが、衆人姦視の中で改めてそれを命じられると屈

辱感が喉奥までこみ上げてくる。しかし、まともな女の子なら従えないような淫らな要求でも、姉に命令されれば妹は拒むことができないのだ。先輩から後輩へ、後輩からそのまた後輩へと連綿と受け継がれてきた華聖学園のしきたりである。

咲は、ちらりと月見のほうを見やってから、慌てて視線を逸らした。唇をきゅつと噛みしめてうつむき、コクンと頷く。

「くくく……五時限目に何度も教えてやっただろ。あの通りにやるんだぞ」

恥ずかしそうな素振りも見せずに志麻はスカートをめくり上げ、なにも穿いていない股間をあらわにする。ゴわゴわとした太い性毛は、頭髪のように金には染まっておらず、黒々と密生して秘唇を覆っていた。ぽつぽつとした大陰唇と、そこからはみ出ている肉びらは、性体験の豊富さを表してか少し黒ずんでいる。そこがすでに濡れそぼっているのは、昼休みの終わりから今まで、絶え間なく咲の口唇奉仕を受けてきたからだ。

「……はい……お姉さま……」

手を背中で拘束されたまま咲は跪いて、首を突き出して姉の股間に顔をうずめる。

(ごめんなさい、先輩……)

そう言うことができるのは心の中だけでだ。

ムツとする牝臭を放つ女唇に口づけして、内部の粘膜に舌を差し込む。じゅぶじゅぶとはしたくない音を立てて潤い豊かな蜜を啜り上げると、花びらの奥の小孔がヒクンと収縮し

て新鮮な体液を吐き出した。あとからあとから湧き出てくる淫汁を吸いながら、下腹部に刻まれた割れ目の間を何度も舐め上げる。すでに何人もの男性を知っているであろう膣穴に舌を挿入し、れるれろと中で蠢かす。

「ん……くは……あふう……上手いぞお。ご褒美をやるよ……」

ブルマーの中で淫らな玩具が激しく暴れ出した。ぱっくりと割り広げられた肉割れの内側で、躡のされていない子どものような傍若無人な振る舞いをする。二枚の花びらを蹂躪し、繊細な粘膜を踏み荒らし、小さな雌しべを押し潰した。咲の秘唇は淫具によっていいように弄ばれ、しかもそれでいながら激しい快楽を味わわされている。

「あひいいい、だめ、だめですうう！ 止めてください。おかしくなっちゃいますう」
快楽のあまりにとうとう秘唇をしゃぶっていられなくなり、月見も聞いているというのに甲高い嬌声を放ってしまった。前後左右に激しく腰を振り立てる。ブルマーの内側に埋め込まれた玩具を振り払おうとしているつもりなのだが、傍目から見ると肉の喜びにより狂っているとしたか解釈できない。

「こら、誰が休んでいいなんて言った？」

ツインテールの根本を掴まれて手綱のように手繰られ、顔面を強引に股間へと引き戻された。志麻の股間がぐいぐいと前に押し出されて、咲は再び口唇奉仕することを強要される。女陰に注ぎ込まれる快美感をこらえきれず、ふしだらに尻をうねり舞わせながらも、

童顔の少女は懸命になって姉にかしづく。

「もしあたしがイク前にあんたがイッたら、罰としてブルマーを膝まで下ろしたまま校内を引き回すよつ。それが嫌なら、さっさと仕事に戻りな」

唇を尖らせて二枚の花弁を代わる代わるついばみ、その間の尿道口にも繰り返しキスをした。包皮から顔を出しているクリトリスを唇の間に挟んで吸引し、それがますます硬くしこるようにと促す。ぷくつとふくれきった肉豆を舌先で何度もつつき、あるいはねつとりと転がした。自身の秘唇を襲う快感をそのまま返そうとするかのように、激しく舌奉仕にいそしむ。

じゅぶ、ちゅば、じゆるじゆる……にちゅ、ちゅば、くちゅくちゅ……。

唾液とも愛液ともつかない粘液が、咲の唇の端から涎となってだらしなく垂れ落ちていった。ブルマーの内部でも、秘められた花が大量の蜜を吐き出して下穿きを汚している。性感の水位は徐々に上昇しており、溺れてしまうのはもう時間の問題だ。もし姉を満足させるより早くそうなってしまうたら……：自分は淫虐なお仕置きをされるだろう。これまでの経緯を考えると、先程の言葉が単なる脅しだけとは考えにくい。

ブルマーを膝のところ絡ませ、産毛しか生えていない未熟な肉割れを剥き出しにしたまま校舎内を歩かされるのだ。奴隷か罪人のように引き回されて、女の子の最も秘密な肌を何百人もの生徒に見られる。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>